

南米ボリビア ウユニ塩湖紀行

25期 齋藤 陽子

2017.2.15～23日の9日間、一度は行って見たい奇跡の絶景 ウユニ塩湖に行って来ました。
 関空からロサンゼルス空港まで9時間。7時間の休憩を経てペルーのリマまで8時間。

ペルーは金、銀、銅、鉛、亜鉛など豊富な鉱物が産出される、世界1,2位の経済産業でしたが、スペインの植民地になってからは、生活も産業もスペインの支配下となり、原住民はことごとく弾圧されました。時が流れ、スペインが撤退する時には、価値あるものが大量に持ち去られたそうです。



しかし、今でも世界の5本の指に入る鉱物資源大国で、輸出のための輸送に使う線路が、港まで続いています。
 戦後、日本からのブラジル移民者は、船で一か月半以上掛かってリマの港に着き、陸路でブラジルまで辿って行ったそうです。ブラジルまで行かずにそのままリマで暮らし始めた人も大勢いて、リマの街を案内して下さったガイドさんは日系三世。リマの降水量は年間約200ミリでガイドさんは生まれてから一度も傘を差した事がないとか。

リマの街の観光を済ませ、ボリビアのラパスまで2時間。
 ラパス空港は、国際空港としては世界一高い所に作られた空港(標高4060m)。飛行機のドアを出た途端、息苦しくてこれからの行程は大丈夫かと心配になりました。

ボリビアの首都ラパスは、高低差700m程の、まるで播り鉢のような地形の街で、底に当たる所に公共施設、銀行、各企業、病院、繁華街など殆どの経済の軸が集まり、行き交う人は半端じゃ無い多さで溢れ返っています。
 その活気溢れる街を取り囲む、便利の良い場所に富裕層の家が建ち並び、上に行く程、経済事情の厳しい人達が住んでいて、昔は歩いて、今は乗り合いのマイクロバスや、ワゴン車に詰め合って、通勤、通学、買い物に利用されています。それらの乗り物は日本車も多くみられ、長年使用されているらしく、行き交う車の殆どが車体にぶつけた跡や、穴の空いているもの、何度も塗装を繰り返したのかと思うような、層になっている車ばかり。たまに通る綺麗に洗車されたバスには、ホワイトカラー層と思われる、小綺麗な服装の人達がゆったりと乗っていて、此处だけでも貧富の差を感じないではられません。



リマ市内



白亜の塩のホテル
 壁も柱も椅子も真っ白

近年、この街にロープウェイが設置され、山の上400m迄、片道50円で乗れる様になりました。上りだけ体験してきましたが、凄く近代的な、中は広々とした6人乗りのゴンドラで、ラパスの街が一望出来ます。今、運行しているのは2機ですが、今年中に1機、2～3年中には合計5機運行する予定だそうです。便利に、楽になりそうですが、すべての山の上の住人が、それを利用出来るか

どうかは、今後の課題なのかも知れません。

ラパスを後に、さらに 50 分掛かって、3日目にやっとウユニ空港に降り立ちました。

これでも何年か前より、うんと便利になったとか。

四駆の車に分乗して、宿泊先の白亜の塩のホテルへ。

壁も柱も、椅子もテーブルも廊下も真っ白。廊下に飾られたオブジェも、真っ白な塩。

その日から3日間、白い塩の世界を堪能。残念ながら、元々鏡張りの景色を見たくて雨期を承知で行った為、雨や曇りばかりで、星空や朝焼けは見られませんでした。しかし、曇っていても雨が降っていても、さらに雹まで出迎えてくれていても、取り敢えず塩湖に向かって出発します。

うたた寝をする程走ると不思議。嘘のように空は晴れているのです。水のない所では、怪獣のフィギアを使ってトリック写真。水の溜まっている所では鏡張り写真。昼食は、塩湖の中でテーブルやパラソルを設えて、ピクニックランチ。ずっと向こうの右にも左にも、大きな雨柱が立っていても広いから平気。いよいよ雨雲が近づいて来たら、さあ出発。またまたひと眠りする程走ると不思議。周りの山や雲が水面に映って、絵の様な鏡張り。ツアー仲間の人達と、お決まりの「UYUNI」の人文字も作って大はしゃぎ。

塩湖の中にあるインカワシ島という島のサボテンは、一年に 1 cmしか成長せず、最大級の 5m 近いサボテンを見ただけで、500 年位前からこのような植物が生え、枯れる事無く育っているのがわかります。

島はサンゴが化石化したもので、この辺り一帯が海だった事を示し、地殻変動によって地面がせり上がってアンデス山脈が形成され、そこに閉じ込められた海水が蒸発。流れ出る川も無く塩だけが残り、湖のようになったといわれています。塩湖の広さは東京都の 5 倍。一つの湖で様々な気象現象が巻き起こり、塩湖の余りにも大きいのに驚かされます。地底からミネラルたっぷりの温泉が湧き上がり、現地の人々が健康の為に足を浸しに来ていました。

プロの腕に掛かった絶景とは雲泥の差は勿論だけれど、デジカメ片手に、変てこ写真だ、失敗作だと笑いながら、同行の人達と十分楽しい撮影が出来ました。ただ、塩湖でも標高 3800m。軽い高山病のせいか、頭が痛かったり、息苦しかったり、辟易したのが残念かな。

楽しい異次元を経験し、飛行機 4 機乗り継いで、また三日掛かりで関空に戻って来ました。

ボアのフード付きコートを着て日本を出発。ペルーでは日焼け対策の為薄めの長袖。曇った塩湖では、ボアのコートかユニクロのウルトラダウンのジャケットと、山用のレインスーツ。日が差せば半袖 T シャツ。サングラスに日焼け止めクリーム、ホカホカカイロ、レインシューズ等々。スーツケースの中にオールシーズンの荷物を入れ、重くて、重くて。飛行機の重量制限もあって、お土産を買うのも大変でした。



見渡す限り絵の様な鏡張りの風景



UYUNI の人文字



インカワシ島のサボテンと私

ウユニ塩湖でおすすめのお土産ベスト5 撰

(インターネット投稿引用)

1位 高確率で破けるウユニの塩

「えっ、破れちゃっていますか？ やっぱりね。この塩のパッキング、原始的なんですよお」

(実際に、この目で見て来ました。250g 入るビニールの袋に、パパッと塩を詰め込み、数個穴を空けて、小さなガスの炎を出している鉄パイプに、ビニールをジュッと当ててヒートシールをして終わり。すべて手作業)

2位 使い道が見当たらない、よく割れる塩で出来た器
まあ、よく割れてくれる。下手したら、梱包の段階で割れるのが勇ましい。何に使うか？ 女性のジュエリーを入れようものなら、あっという間に錆びてしまう。

そりゃそうだ。塩で出来ているのだから。

3位 アルパカも入っています。毛羽立つマフラー。
現地の人が、丹精込めて織っているマフラーと思いきや、ペルー製も多い。さらに、アルパカ 100%では無いのに 100%とうたっている。どうして分かったかという、大量購入したいと言ったら、店員が近くの工場から持ってきてくれたマフラーに付いていたタグに、ポリエステルが文字が。通常、店頭のマフラーにはタグが付いていないか破かれている。

4位 シャツと言うより染料 パロディTシャツ
このシャツの色落ちが半端じゃ無い。洗濯は単品でするのが基本だが、他のシャツと一緒に洗った日には、色落ちというより「新種の染色法か？」と思わせ、激しい色移りを経験する事になるだろう。

5位 実は捕まるティパックセット

ボリビアから持ち出しは出来ても、アメリカ、日本には持ち込めないのがココ茶。運良く持ち込めるかも知れないが、運び屋さんになってしまうので、絶対買ってはいけない。5種類セットになっているタイプで、5種類の中に、ココ茶が入っているケースがある。

「アメリカで、別室へ連れて行かれちゃってさあ」という伝説を作りたい人には、持って来い。

それでもなお、色々あって旅は楽しい。



水の無い所ではトリック写真を



怪獣のフィギアを使って格闘写真を



日本には持ち込めないココ茶